



ENCYCLOPEDIA
NIPPONICA
2001

日本文
百科
全書

ENCYCLOPEDIA
NIPPONICA
2001

24

りきん

ENCYCLOPEDIA
NIPPONICA
2001

日本大百科全書 24

©SHOGAKUKAN 1988
1988年11月1日 初版第一刷発行
定価 7,800円

編集著作 相賀 徹夫
出版者

発行所 小学館

郵便番号 101-01
東京都千代田区一ツ橋2-3-1
振替 東京8-200番
電話 編集・東京03-230-5620
業務・東京03-230-5333
販売・東京03-230-5739

印刷所 凸版印刷株式会社

本文 (特抄百科用紙) 王子製紙株式会社

口絵 (特抄アート紙) 三菱製紙株式会社

表紙 (特製クロス) ダイニック株式会社

製本 凸版印刷株式会社
若林製本株式会社

- * 本書に掲載した日本関係地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図、5万分の1地形図、20万分の1地勢図、2万5千分の1土地利用図を使用したものです。
- * 造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。
- * 本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan

ISBN4-09-526024-6



東山魁夷『秋彩』部分



東山魁夷画『秋彩』
1986年（昭和61）73.0×100.0cm
山種美術館蔵

背後の山は逆光の青紫色。
前景の紅葉は夕陽を透かして赤と黄に。
洛北の秋彩の華やかさ。

（東山魁夷・文）

「和魂漢才」のありか

日本人や日本語の成立とも深くかわるることであるが、わが国は古代から列島以外の諸地域と交流し、摂取してきたものが少なくない。摂取したものを十分に受容し、みずからの風土に調和したところに、日本文化の源流がみいだされる。

ちなみに「和魂漢才」という思想が、すでに平安時代から出現している。これは日本古来の心構えと、中国伝来の学問・技芸とをいい、この二つを兼ねそなえることが、日本人の理想的なあり方とされてきた。「やまとだましい」と「からざえ」とを漢語で表現したものである。

江戸後期の国学思想以来、この「やまとだましい」には特殊な語意が加わり、勤皇愛国心をさすようになった。だが、これは後世の意味づけであって、本来、大和魂は思慮分別であり、それは人々のうえに立って世の中を導いていく能力の根源となるものであった。

はじめて「やまとだましい」が文献に現れるのは、藤原道長（九六一—一〇三七）の時代である。『源氏物語』の「少女」の巻に、光の君が「猶なほざえ（才）をもととしてこそ、やまとだましみの世にもちるるるかたも、つよからめ」として、人々の反対を押し切って息子夕霧を大学寮に入れ、学問させることが見えている。「やまとだましい」を充実させるために「才」の必要を説く。上流貴族の要件として「魂」が強く意識されていた。それに対して「才」は各論的であった。『源氏物語』『枕草子』という平安時代を代表する二つの女流文学は、それぞれの後宮サロンを支配する情緒あるいは思想の傾向を示して、「魂」の文学と「才」の文学として対蹠たいせき的でもある。

光の君は「色好み」であるが、それはむしろ古代における理想的な貴族のイメージですらあった。思うままに自分の欲望を遂げていきながら、しかも純真で、心が八方にゆきわたり、融通自在で、かたよりがなかった。彼が嫉妬の怒りから柏木を心理的にじわじわと締めあげ、死にいたらしめるのは、残忍のきわみとも思われるが、それも神話時代のスサノオノミコトや日本武尊やまとむすねの怒りと同じである。古代人が偉大な神格や人格に認めた性格であり、いわば大和魂の発露ともいえる。

こうした様相から、古くから知識層にとって「やまとだましい」が、人生百般にわたって総合的な教養をもとめていたことが知られる。世に処していくうえで、ひろい教養とともに、中国渡来の専門の知識を学ぶという、いわば兼有が図られていた。

こうした日本人の思想は、当然のことながら近代に入って「和魂漢才」から「和魂洋才」の考え方を導き出してくる。それは明治・大正において、多くの知識人たちを支配する理念となった。残念なことに戦前・戦中において、大和魂は独善的な排外思想として猛威をふるったが、それは、その原意とはまったくかわりがないものであった。

和魂漢才

装 丁

亀倉雄策

本扉／書

青山杉雨（連作書体のうち、清時代、吳昌碩書法による行書）

巻頭口絵

東山魁夷

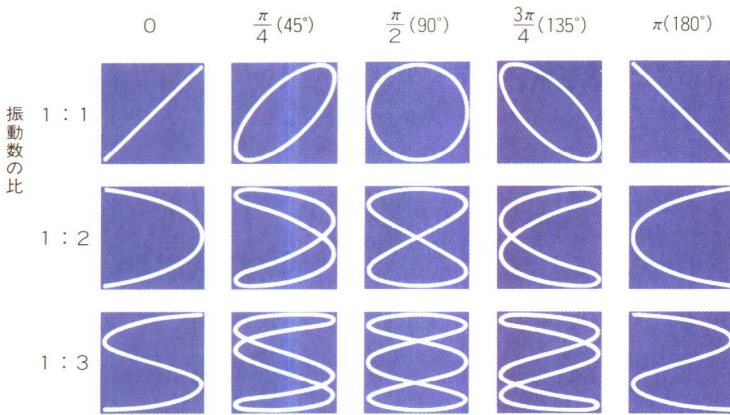
本文五十音題字

木元壽美江

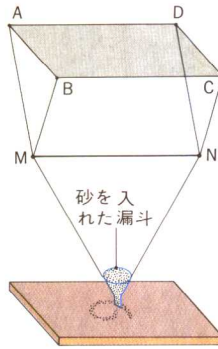
りさる

リサージュの図形

【図A】リサージュ図形(二つの振動の振幅が等しい場合)



【図B】リサージュの装置



糸はA B C Dで固定されており、細い棒MNの上と下の振動は互いに垂直なので、漏斗は両方の合成運動をする

りさ

李濟 りさい （李濟）
 生没年未詳。中国、明代前期の画家。字は以政。莆田（福建省）の人。雪舟に影響を与えた画家として有名。宣徳（二〇三〇）のとき、戴進、謝環、石銳、周文靖とともに仁智殿で画院画家として活躍した。郭熙、馬遠、夏珪を学んだといわれるが、その筆触荒々しく墨面も重い画風は、同時期の戴進から強い影響を受けているものと思われる。代表作は『山水図』（東京国立博物館）『雪景山水図』（京都、個人蔵）。

李濟深 りさいしん / リーチーシェン （李濟深）
 中国の軍人。広西省梧州の人。字は任湖。北伐のとき国民革命軍第四軍長、黄埔軍官学校副校長となり、一九二七年国共分裂後は広東、広西で軍政両権を握るが、蔣介石と対立した。三三〇年陳銘枢らと反蔣反帝主義を掲げ、福建人民政府を樹立したが失敗。抗日戦では広西で活躍し、第二次世界大戦後内戦に反対し、国民党革命委員会を組織した。新中国成立後、全国政協会議議長などの要職を歴任。〈阿川修三〉

リサイタル recital 独唱会、独奏会。ラテン語の *recio*（朗読する）から生じた語で、詩の朗読会をさしていたが、のちに文芸や音楽などの一人で行う公開パフォーマンス（独演会）にも適用されるようになった。日本ではおもに音楽面で用いられ、演奏者一人（伴奏者を除く）の音楽会をさすが、今日では演奏者二〜三人の小規模な音楽会も、この名称でよぶ傾向にある。また、複数の独奏（唱）者が合同で開くジョイント・リサイタル *joint recital* の形式も存在する。なお、この語が独奏会の意で用いられた初例は、一八四〇年六月九日ロンドンで開かれたリストのピアノ演奏会の予告においてであるといわれている。〈アルパレス・ホセ〉

リザー・シャール （リザー）
 リザー・シャール （リザー）

リサージュ Jules Antoine Lissajous （リサージュ）
 フランスの物理学者。パリのリセ、サンルイの物理学教授。波動に興味を持ち、振動の研究で光学的方法を発展させた。一八五五年、彼は二本の音叉を振動させ、光線それらの音叉で順に反射させ、その像をスクリーンに映し出す装置をつくり、単振動の合成を示す図形を得た。このリサージュの図形とよばれる曲線は、今日ではオシロスコープの水平軸、垂直軸にサイン波を引加することにより容易に得ることができる。七四年よりいくつかのアカデミーの会員を経てパリ科学アカデミー会員となった。↓リサージュの図形 〈佐藤 忠〉

リサージュの図形 —のすけい 互いに垂直な方向に振動する二つの単振動を合成したときに得られる運動の軌跡。一八五五年にリサージュがこの運動軌跡を実験的に示す装置を考え、この名がつけられた。リサージュの図形は、互いに垂直な二つの単振動の振幅、位相差などによって複雑な曲線を示す。図Aは、二つの振動の振幅が等しい場合に、振動数の比と位相差によってリサージュの図形がどのように変わるかを示したものである。二つの振動数が等しい場合には、位相差がゼロまたはπの整数倍のときに直線となり、π/2の奇数倍のときに円となり、その他の場合には楕円となる。二つの振動数が異なる場合には、振動数の比と位相差に従って図のような複雑な曲線となる。

リサージュの図形を描かせる実験としては、電気的な方法と力学的な方法がある。電気的な方法としてはオシロスコープの水平軸と垂直軸にそれぞれ正弦波発振器の出力をつなげばよい。この場合、一方に周波数のわかた正弦波を加え、他方に未知の周波数を加えることによりリサージュの図形から未知の周波数を求めることができる。力学的な方法の一例としては、図Bに示すように、上部と下部の振動が互いに垂直になるように結んだ糸の先に砂を入れた漏斗をつるした装置がある。こ



リサル
 マニラのリサル公園に建つホセ・リサル記念碑

れはリサージュが用いた装置で、漏斗の細孔から流れ出る砂が下の平面上にリサージュの図形を描く。↓単振動 （石川光男）

リースモンキー rhesus monkey （リースモンキー）
 Macaca mulatta 哺乳綱霊長目オナガザル科のアカゲザルの英名。ヒトのRh式血液型は、アカゲザル血球でウサギを免疫して得られた抗血清を用いて発見され、その名称は本種の英名に由来する。↑アカゲザル （川中健二）

リサーチ・アンド・デベロップメント （リサーチ）
 研究・開発

リサル Jose Rizal （リサル）
 フィリピンの民族的英雄。ラグナ州カランバ町の富裕な大借地農の家庭に生まれる。マニラのアテネオ・デ・マニラ学院、セント・トマス大学で学んだのち、一八八二年スペインのマドリッド中央大学に留学、医学と古典文学を修めた。留学中、ヨーロッパの自由主義思想に触発され、同胞の留学生生らに呼びかけて、スペインのフィピン統治改革運動を開始した。彼は初め、小説『ノリ・メ・タンヘレ』（八六セ）や運動の機関紙『団結』紙上に発表した評論などを通じて、スペイン政府に植民地改革を促す運動に専念したが、八七年に帰国して郷里カランバ町で組織した修道会所領の地代値上げ反対運動が、当局の徹底した弾圧を受け、彼は国外脱出を余儀なくされるといふ事態を経験して以後、状況によっては革命もやむなしとする急進的な思想を抱くに至り、二番目の小説『逆説』（八六セ）を公にした。同時に、スペイン政府に向かってする言論活動よりも、むしろフィリピン人自身

の間に民族的自覚を育成する仕事に専念するようになった。九二年六月決死の覚悟で再度帰国、七月二日「フィリピン民族同盟」を結成したが、数日にして逮捕され、ダビタン島へ流刑された。九六年八月フィリピン革命が勃発すると、革命扇動者の容疑を受け、一月三〇日処刑された。

池端雪浦(ハセ・リサル著、岩崎玄訳)ノリ・メ・タンヘレ(九六・井村文化事業社)▽同著 同訳「反逆・暴力・革命」(九六・井村文化事業社)

驪山(りざん)リリヤン 中国、陝西省中部、渭河平原の南に、秦嶺山脈の前身としてそびえる山。西安の東二五、臨潼県城の南にある。最高所は標高二三〇二、東嶺と西嶺の二峰がある。美しい風景と周辺にある歴史的遺跡によって、西安付近での有数の観光地となっている。とくに「驪山晚照」は関中八景の一つとされる。山麓には温泉があり、長安に都を置いた歴代の王朝の離宮が設けられたが、唐の玄宗皇帝が楊貴妃のためにつくったという華清宮は有名である。

リザンドロス(Lysandros) (前五三九-前四八〇) 古代ギリシアのスパルタの将軍。ペルシアのキロスの友誼を得て海軍を強化し、紀元前四〇五年アイゴスポタモイにアテネ海軍を壊滅させ、翌年アテネを降服させた。スパルタの支配体制確立のために各地にデカルキア(十人政治)を樹立、ハルモステス(総督)を派遣した。が成功しなかった。自ら王位につこうと選挙王制導入を試みたが失敗、アゲシラオスを王位につけ操ろうと図ったが、王は彼を退けた。コリント戦争(前五九三-前六二)中、ボイオティアでテーベの不意打ちに倒れた。

李參平(りさいへい) 生没年不詳。江戸初期の陶工。佐賀県西松浦郡有田町の龍泉寺には明暦元年(一六五五)の条に「月窓浄心上田川三兵衛」なる戒名があり、これが李參平の没年とも考えられている。朝鮮半島李朝時代の忠清南道金江の出身。文祿・慶長の役を契機に帰化した陶工の一人で、日本名は金ヶ江三兵衛。肥前国(佐賀県)鍋島藩の祖鍋島直茂に仕える多久安順が連れて帰った。初め小城郡多久(現多久市)に窯を築き、一六一六年(元和二)に有田町泉山に白磁窯を発見し、有田町上白川天狗谷の地でわが国初の白磁創製に成功したと伝えられる。有田白磁窯、すなわち伊万里焼の磁祖

として尊崇され、陶祖神社の祭神として祀られている。 (矢部良明)

利子(りし) interest 借入金、Zins 貸付金、一定期間貸し付けることに對する報酬。貸し付けた元金に對する利子の割合を利子率という。利子は利息、利子率は金利ともよばれる。

〔近代経済学からみた利子〕利子や金利は資金の貸借に応じて成立するから貨幣的とみられがちであるが、実物的な側面にたつて利子や金利の資源配分に果たす役割を重視した見方も古くから唱えられてきた。たとえば、ベーム・バベルク、K・ウィクセルやI・フィッシャーたちがこの立場にたつている。すなわち、利子は、家計にとつては将来の消費に備えて貯蓄する一種の時間選好に對する報酬であるとする。現在の消費を犠牲にするのであるから、これに對して報酬(利子)が支払われるが、この利子率が高ければ高いほど、家計は貯蓄水準を高めようとする。また、企業は現在の生産を減少させても、一定の設備を増加させて将来の生産性を高めようとする。この結果、利益(利潤)が得られるので、この設備を増加させるための資金に利子を支払おうとする。これを企業の投資行動とよぶが、企業は投資行動に基づいて一定の利潤を得ることとなる。市場で資金を借り入れて支払う金利よりも投資に對する利潤率が高ければ、企業は投資を行うこととなる。家計の時間選好に基づく貯蓄と企業の投資の水準を決めるのは、前者が供給、後者が需要という関係で成立する市場での金利の高さで、この金利は実物的な利子率とみなすことができる。

金利のもう一つの見方は貨幣的利子率であつて、代表的な説明としてJ・M・ケインズの流動性選好説があげられる。すなわち、利子率は、人々が流動性という長所をもつ貨幣を手放すことに對する報酬であると主張する。金利が高くなればなるほど、人々は貨幣をより多く手放して債券を保有しようとする。ケインズはこうして成立する貨幣利子率と資本の限界効率(設備投資を二単位増加させたときの期待収益率)の水準が一致するところで投資が決定されると主張した。

利子率の決定理論としては、今日では貸付資金説が有力である。貸付資金説は、貸付資金市場の資金需給関係によつて成立する金利と、貨

幣市場において貨幣の需給関係によつて成立する金利との一般均衡によつて金利水準が決まると主張する。

なお、金利には名目金利と実質金利とがある。名目金利からインフレ率を差し引いたものが実質金利である。将来インフレ率が上昇すると市場が予想するときは、名目金利は上昇することとなる。

以上述べてきたように、利子率は金融市場における需要と供給によつて決定されるが、金融市場は、そこで取引される金融資産の多様化に依つていくつもの市場に分かれていく。金融資産の満期という観点から分類すると、長期金融市場(資本市場)と短期金融市場(貨幣市場)とに大別されるが、それぞれ市場はさらに取引される金融資産ごとに細分される。そしてそれぞれ市場で金利が成立するから、現実の市場金利も多様である。この各種の金利の間にある種の規制が存在するのではないかと見方されるようになり、これを金利構造または金利体系とよんでいる。

金利構造には、取引される金融資産の市場性の度合いやリスクの度合いによつて各種金利の関係をとらえる見方もあるが、もっとも著名なものとして、金利の期間別構造がある。これは金融資産の満期に伴う各種金利の関係をみよとするもので、横軸に満期、縦軸に金利をとつて、各種金利をつないだ利回り曲線(Interest Curve)が用いられる。利回り曲線は、流動性選好説によれば、長期資産のほうが流動性を手放す期間が長くなるので金利は高くなり、したがつて右上がりの曲線となるが、将来の予想を重視する期待理論ではかならずしもそうはならない。すなわち、将来市場金利が上昇すると予想するときは、貸し手は長期資産の需要を強め、借り手は長期資産の供給を高める。そこで短期資産の価格は上昇し、利回りは低下するが、長期資産の価格は低下し、利回りは上昇する。この結果、短期資産の利回りが長期資産の利回りより低い右上がりの曲線となるが、市場が将来金利が下がると予想するときは反対に右下がりの曲線となる。

金利の決定を自由化して市場にゆだねるとどのようにさまざまのタイプの利回り曲線が描けるか、政府や中央銀行が金利を規制すると多くの場合は右上がりの曲線となる。わが国では第二次世界大戦後コール・レートを除いてほぼす

べての金利を規制してきた。また、人為的な低金利政策がとられてきた。この結果、資金の配分は金利ではなく、金融機関などによる信用割当てで行われてきた。そこで一九八〇年代に入ると、先進各国よりは後れたものの、一連の金利自由化措置がとられた。その結果八八年(昭和六三)現在では、小口預貯金金利を除いてほぼすべての金利の決定が市場にゆだねられているとみてよい。

金利 ↓金利体系 (原 司郎) 原司郎編『テキストブック金融論』(六六・有斐閣)▽F・A・ルツ著、城島国弘訳『利子論』(六三・巖松堂)▽阿達哲雄著『金利』(九五・金融財政事情研究会)

〔マルクス経済学からみた利子〕貨幣は、資本主義生産のもとでは、貨幣それ自体の規定のほかに、自ら増殖して平均利潤を生む価値(資本という使用価値をもつ商品となる。利潤をもたらず能力をもつこの貨幣を貨幣所有者が他人に譲渡すれば、後者は機能資本家となり、資本として機能する貨幣の使用価値に對して生産された利潤の一部分を支払う。これを利子という。もし貨幣が譲渡されないならば、機能資本家は利潤を生産できず、貨幣所有者はその所有者に利潤の特定部分である利子の取得を与えない。したがつて利子は、譲渡によつて利潤を生むという使用価値をもつ資本としての商品の価格、資本の価格として現象する。そしてその分量を規定するのが利子率である。

〔利子率とその変動〕利子率は、貸付可能な貨幣資本に對する利子の比率を表す。利子は機能資本家の平均利潤の一部であるから、その最高限は平均利潤そのものであり、最低限は無制限にゼロに近い。利子率はこの限界内で貸付可能な資本に對する借り手(機能資本家)と貸し手(貨幣資本家)の需要・供給の関係のみで決まり、それ以外に利子率を決定する内的法則というものはない。

産業資本、商業資本の平均利潤の現実の運動は、利子率の変動にその限界を与える以外には、利子率の変動とはなんの関係もない。つまり利子率は、担保の有無・種類・等級、貸付期間など借り手・貸し手の需要・供給に作用する要因によつて相違し、時間的、場所的に絶えず変動する個々の市場利子率があるのみで、それがおのずから落ち着く自然利子率なるものもはまったく存在しない。なぜなら利潤率の個別の変動と違い、貸付可能資本に對する需要・供給が

総量として、相互に区別できない均一の形態として、また信用業の発達・集中に促進されて同時大量の運動をとるからである。したがって利率は利潤率のような平均化傾向はもたず、はつきりと日々の経験のなかで直接にどの瞬間でも固定的につかまえられる大きさとして現れる。平均利率、中位の利率は算定されるのみであり、時間的には産業循環過程の利率の変動の平均を算定し、場所的には資本が長期的に貸し出されるような利率を算定することから得られるにすぎない。それは、生産過程・流通過程で貸付可能な資本の性格がなんの役割ももたないからである。利率の決定は、需要・供給、習慣、法的伝統という偶然的、純経験的なものにすぎない。

利率は、不況期には、利潤率とともに一般にきわめて低い。好況期には、機能資本の意欲で漸次上昇し、繁忙期には、産業資本の投機的拡大で騰貴し、過剰生産になるや、利潤率は資本の還流が失われて急落し貨幣資本供給は減少するのに対し、金融はかえって逼迫するため、利率はいっそう高騰する。恐慌時には、貨幣資本供給は激減するが、機能資本は自己の債務のため貨幣資本を求め、利率は最高に急騰する。このように、産業循環の局面を決める利潤率に対して利率の変動は同一ではない。

【利子と企業者利得】以上のように、利潤の一部を利子にするのは、資本家の貨幣資本家と機能資本家とへの社会的分裂によってだけである。したがって、借入れを行った機能資本家の平均利潤は、まず、貸し手の貨幣資本家に支払う利子と彼自身の分け前となる利子を超える超過分とに量的に分割される。

ついで、両者の質的分割が始まる。機能資本家が貨幣資本家に支払う利子は、貨幣資本家が生産過程・流通過程で活動していかないにもかかわらず、資本所有のゆえにそれに備わったものとして貨幣資本家にもたらされる果実。すなわち資本所有が直接生んだ部分と観念される。これに対して、平均利潤のうち機能資本家に帰属する利子を超える超過分は、彼の生産過程・流通過程での資本機能、すなわち企業者としての能動的役割におのずから備わり、そこから生ずると観念され、その果実として現れる。こうして同一の源泉でありながら、本質的に異なる二つの源泉から生じたように、相互自立的現象をとる。

この分裂が社会的に確定すると、借入れない自己資本のもとでも、平均利潤を、一部は資本所有による利子とし、他は資本機能による企業者利得とする質的分割が生じ、そう観念されるようになる。

こうして貨幣資本家は、機能資本家と対立して賃労働とは対立しない。なぜなら、利子は資本の生産過程の現実の機能から生まれたにもかかわらず、そこから離れた資本所有の産物であるとき、剰余労働の産物としては現れないからである。他方、企業者利得も賃労働とは対立せず、利子とのみ対立するように観念される。なぜなら、平均利潤が与えられていれば、企業者利得の大きさは、労働によつて規定されないで、利子の大きさによつて規定されるからである。さらに企業者利得は、資本機能そのものの所産として、すなわち、機能資本家の指揮・監督の機能としての「労働」の所産として現れる。かくして企業者利得は、さらに「監督賃金」の表象をとる。資本機能は、剰余価値、不払い労働の取得という資本主義の性格にあるのに、いつの時代にもみられる指揮・監督という抽象的機能に置き換えられてしまうのである。

このようにして、利子と企業者利得への相互自立化による質的分割は、同じ剰余価値なのにそれを隠蔽し、資本主義の生産の本質をまったく見失わさせ、利子もそう観念される。↓利子付き資本

④K・マルクス著『資本論』第三巻第五篇第二一―二三章(向坂逸郎訳・岩波文庫/岡崎次郎訳・大月書店・国民文庫)▽信用理論研究会編『講座・信用理論体系ⅠⅡ(一九六・日本評論社)▽富塚良三他編『資本論体系』

6 利子・信用(一九六・有斐閣)

李斯りし(一前二) 中国、秦の統一に功績のあった法家の政治家。戦国楚の上蔡の人。荀子について帝王の術を学んだが、楚や東方の諸国には天下を統一する望みがなかったから、秦王政(後の始皇帝)に仕えることになった。李斯は、東園離反の策を進言し、それが成功すると客卿(他国出身の大臣)にあげられた。当時、逐客令(他国出身者の追放令)が出されたが、李斯が反対論を唱えたと説かれた。以後、李斯の策は重用され、秦王を助けて天下の統一を実現させたので、丞相の地位についた。郡県制、焚書坑儒、文字・度量衡の統一

などの政策は彼の進言による。始皇帝の死後、趙高が末子胡亥を二世皇帝にたてる謀略に荷担したが、のちに二人の無道ぶりを非難して投獄され、腰斬の刑で死んだ。

李贄りし(一五七一―一六〇二) 中国、明末の陽明学者。初名載贄、号は卓吾、別号温陵。福建省泉州府晋江県の人。「焚書」「藏書」などの著書がある。彼は、なにもものにとらわれない純粹で原初的な心を童心とよび、そこに内面的權威を認めて、形骸化した既成の価値基準や道徳意識と対立させた。それを軸にあからさまな名教批判を行い、従来絶対的權威を有してきた經典や聖人にまで批判を加えた。また、この心は万人に平等に賦与されていると考えることから、性別や階層などを超えて平等が主張されることになる。心の真実の発露である限り、儒仏道三教の別や文学におけるジャンルも本質的なものとはみなされず、そこからは三教一致論や俗文学の顕彰などが尊かれ、個性尊重や私肯定の態度、平等主義などが推し進められた。彼は人間や社会を具体的に、現実的に洞察し、そこに人間の心にあるさまざまな欲望をみだし肯定した。彼は生存の欲望のような根源的の欲望を根底に置き、そこにさまざまな欲望の展開を基軸として据えて、欲望の否定的側面をも考慮しながら、明代末期の中国社会に適應する秩序を再構築しようとして展望した。しかし固陋な道学者に對する鋭い批判や揶揄、徹底した名教批判、功利主義的態度、儒教からの逸脱、なによりも自ら異端を任じた彼自身の奇矯な行動などから、弾圧を招いて逮捕され、七六歳の高齢で獄中に自刎し果てた。このため彼の構想も挫折し、清代以降の課題として残された。

李珣りし(一五二一―一八〇四) 朝鮮、李朝中期の代表的な朱子学者。政治家。京畿道徳水の人(出生地は江原道江陵)。字は叔献、号は栗谷。聰明な母・申師任堂に教育を受け、一三歳で進士初試に合格。一六歳のとき母を失った悲しみは大きく、一時仏教に傾倒したが、二〇歳のとき儒学に復帰し、聖人を志す自警文をつくる。以後の活躍は目覚ましく、二三歳のとき李退溪(五八歳)を瞻目させ、同じ年科舉別試の答案「天道策」で一躍名をあげ、遠く中国にまで聞かされた。彼は宣祖の信任厚く、重職を歴任したが、直言をはばからない大司諫として多数の上疏文(上奏文)を残した。一五九二年壬辰倭乱(豊臣秀吉の朝鮮侵略)文祿(役)の八年

前に国防のため一〇万の兵養成を建議したことによく知られる。また、訓童書『擊蒙要訣』、帝王学として編まれた『聖学輯要』もこの間の作である。彼は哲学者としても優れ、李退溪の理気互発説を批判した気発理乘説や、仏教をくぐり抜けた理通气局説は、朝鮮朱子学(性理学)の独自な到達点を示し、李退溪とともに双壁と仰がれた。

理事りし 会社、私立学校、協同組合、公団などの法人において、一人または数人置かれ、対外的には法人を代表し、対内的には定款や総会の決議に従って法人の日常業務を執行する機関で、法人にはかならず置かれる。理事の職務権限(代表権を一人に制限したり、一定の行為につき総会の同意とすることなど職務権限に対する制限も含む)、選任、解任などについては、株式会社等の営利法人では商法(たとえば、第二五四条以下)の取締役および取締役(の定め)等に、特別法によって設立される法人についてはそれぞれ特別法に定めがある。それ以外の公益法人については民法が適用される。

リージ Nicola Lezzi (一八六一―一九五七) イタリアの小説家。カトリック系文芸誌「フロンテスピーツイオ」を創刊。代表作『寓話』(一九三三)、『魂の故郷』(一九三六)、『田舎司祭の日記』(一九三九)などは、古いカトリック作家の手法を意識的に取り入れながら、現実と非現実の世界が交錯する特異な雰囲気のために、神秘主義、宗教性をうかがわせる作品。ほかに『愛と荒廢』(一九四〇)などがある。

リンアス Lysias (前四八五―前四〇五) 古代ギリシアの法廷弁論代作者。シラクサからアテネに移住した富豪ケファロス Kephalosの子。当時最高の知識人との交際に恵まれて育った。一時、南イタリアのトゥロイイに移住したが、紀元前四二二年アテネに戻り、盾製作所を経営。前四〇四年には「三十人僭主」により財産を没収されメガラへ逃亡した。民主政回復に貢献し、前四〇三年アテネに戻ると、一時、市民権を付与されたが、結局無効とされ、在留外人として法廷弁論の代作で生計を立てた。二〇〇編以上の弁論を書いたとされているが、現存するのは、断片も含めて三〇余編である。文法は簡素で明快であり、日常語を用いながらも洗練された魅力をもつ。

リシアンサス ひとトルコギキョウ (中村純)



李思訓『江帆樓閣圖』絹本着色 101.9×54.7cm
台北 国立故宫博物院 北宗の祖李思訓の山水画、
とくに金碧青緑山水に優れ、精緻な作風は本図から
もよくうかがえる

利子生み資本 りしうみしほん 利子付き資本

リン・H Charles Robert Richet (一八五〇—一九一五) フランスの生理学者。パリの生まれ。

一八七七年パリ大学を卒業し、八七年にパリ大
学生理学教授。神経、呼吸、筋肉などの生理や
肝臓の機能、血清療法などに関する研究を試み
た。八八年細菌を注射すると免疫体を生じること
を確かめ、九〇年初めて血清療法を行った。

一九一三年「過敏性現象に関する研究」により
ノーベル生理学医学賞を受けた。〈大馬蘭三郎〉

リーゼント街 Regent Street
イギリスの首都ロンドン都心部、ウエスト・エ
ンド地区を南北方向に通ずる大通り。両側に各
種高級商店が軒を連ねる。道筋はピカデリー・

サーカス(広場)の北西部で大きな弧を描き、
通りに面する建物の前面もそれにあわせて円弧
状につくられており、この部分はクオドラント
quadrant(四分円街区)とよばれる。ジョージ
四世が摂政(リーゼント)のとき、お気に入り
の建築家ジョン・ナッシュに命じてつくられた
のでこの名がある。〈トロンドン〉 井内 昇

李思訓 りしん (六五〇—七〇〇) 中国、唐代の
画家。唐の宗室の出身で、玄宗朝の宰相李林甫
の伯父にあたる。高宗朝に江都令となり、一時
官を去ったが、中宗復位ののち、益州長史、
左羽林將軍、右武衛大將軍を歴任した。若年よ
り書画に優れ、吳道玄、王維とともに初・盛唐
を代表する画家で、明末には北宗画の祖とさ
れ、山水画は国朝第一といわれた。子の李昭
道もまた画をよくし、大李將軍、小李將軍と父
子並び称されている。同代の書画論家張彦遠
は「山水の変は呉(道玄)に始まり、二季に成

る」と評したが、吳道玄の自由奔放な画風とは
対照的で、きわめて精緻な細密画的作風だった
らしい。 〈吉村 愷〉

李四光 りしう/リースーコワン (一八八九—
一九七〇) 中国の地質学者。英語名は J. S. Lee を
用いる。湖北省黄冈県回竜鎮に生まれる。清国
公費留学生として日本へ留学し、孫文の中国同
盟会へ参加した。帰国後、辛亥革命に参加し
て、のち、イギリス、パーミンガム大学で地質
学を学ぶ。一九一八年帰国して北京大学地質系
教授となった。一九二二年中国地質学会を創立し
副会長となり、国立中央研究院地質研究所所長
を兼ねる。中国、東アジアの大構造について研
究し、三九年英文で『中国の地質』を著した。
またこれより先、四川、北西中国や東シナ海、
華北平原での石油の有望性を指摘する。日中戦
争時は地質研究所の移転とともに、重慶にま
で行った。四七年イギリスに留学し、中華人民
共和国成立後五〇年に帰国した。五二年地質部
(省) が設立されたとき、部長(大臣) に就任
する。第一次五年計画作成に際し、東北地区、
華北平原の石油の有望性と開発の必要性を力説
して受け入れられ、今日の石油産出への道を開
いた。また中国科学技術協会会長、中国地質学
会理事長として、中国の地質学のみならず広く
科学技術の振興に力を尽くした。 〈木村敏雄〉

李自成 りじせい (一六一六—一六四四) 中国、明末の
農民反乱の指導者。米脂(陝西省)の農民出
身。彼の生家は小地主であったともいわれる
が、明朝の政治的腐敗と過酷な税によって没
落、破産し、牧夫のち駅卒となったが失業
兵隊になった。おりしも一六二八年、陝西地方
に大飢饉が起こり、飢饉農民の反乱が起こっ

た。彼は飢兵を率いて反乱に参加、まもなく高
迎祥のもとで隊長となり、闖將とよばれた。
三六年高迎祥の戦死後は一方の首領となり闖王
を称し、他の首領たちの投降後も活動を続け、
四〇年河南省に入るとふたたび強勢となり、李
賊、牛金星ら讀書人層の参加をも得るに至っ
た。自成は彼らの建言により「貴賤にかかわら
ず田を均しくし、三年間徴税をしない」という
民生策を掲げ、「殺人せず、受財せず、姦淫せ
ず、略奪せず」と唱えて軍規を厳しくし、民衆
の支持を得た。やがて四三年には襄陽(湖北
省)で新順王を称し、西安を占領、翌年には国
号を「大順」、年号を「永昌」と定め、官僚制
度を設け国家体制をつくるや、東征軍をおこ
し、三月、山西を経て北京に入城し、明の崇禎
帝を自殺させた。しかし満州軍の援助を得た呉
三桂軍の進攻の前に敗退し、北京を捨てて西に
逃れ、四五年湖北の山中で地主武装軍に殺され
た。しかし彼の残存勢力はのち各地で反清闘争
を続行した。 〈谷口規矩雄〉

李之藻 りしぞう (一六一一—一六三三) 中国、明末
の学者。字は振之、我存。号は存園寄叟や洗礼
名・レオンにちなむ涼菴など。マテオ・リッチに
進士となり南京工部に勤め、一六二二年には南
京太僕寺(車馬・牧畜を司る)少卿に至る。リ
ッチの『坤輿万国全図』などの刊行のほか、西
洋学術やキリスト教に関する多くの著訳を行っ
た。『乾坤体義』『同文算指』『渾蓋通憲図説』
はクラビウスの天文・数学書の、『幾何原本』
はユークリッドの数学書の、『寶有詮』『名理
探』はアリストテレスの自然学・論理学の訳。
『天学初函』はキリスト教、天文・地理・数
学・測量関係の叢書である。『崇禎歴史』編纂
にも加わったが完成前に没した。 〈宮島一彦〉

李氏朝鮮 りししよせん 高麗に続く朝鮮最
後の統一王朝(三三〇—一三九二)。李朝と略す。
〔概観〕咸鏡道地方の豪族出身の太祖李成桂
は、内外政多難な高麗末期に武人として倭寇対
策などに功績をあげて台頭し、政治中枢に参加
した。土地制度改革で得た新興官僚層の支持を
背景に一三九二年高麗最後の国王恭讓王(在
位三三〇—三三三)を追放して国王に即位し、翌年国
号を朝鮮と定め、漢陽(後の漢城、現ソウル)
に都した。初め王族の内紛で不安定だった王権
も第三代太宗のころ安定し、貴族の私兵が廃止
され、朱子学による思想統制の下、中央集権的

官僚制度が整備された。しかし王権は絶対的・
超越的な力をもち、政治は合議制によって行
われ、高級官僚の合議機関として初め議政府
のちに備辺司が実権をもった。第四代世宗から
第九代成宗にかけて国力が充実し、領域が鴨
緑江・豆満江の線まで拡大し、ハンゲル(訓
民正音)が創作され(四四〇)、基本法典である
『経国大典』をはじめ各種編纂事業が行われた。
官僚は原則として科挙で選ばれたとされてい
たが、実際は血縁・地縁の原理が強く作用し、そ
れが政府内部における激しい権力争いとして展
開した。一五世紀末には新興官僚による土禍が
起こり、一六世紀になると朱子学の解釈を理論
的武器とした学問上の争いの体裁をとる党争へ
と発展した。党争は大きく南人、北人、老論、
少論の四派に分かれて争われたが、官僚・儒生
がすべていづれかの党派に属し、父子代々続
く争いを李朝末期まで繰り返した。

冊封を受けた明朝には事大関係をつ結び、日本
とは対等の交隣関係を外交方針としていた。し
かし一五九二—九八年の豊臣秀吉軍の侵入(壬
辰・丁酉倭乱)・文禄・慶長の役)で大きな被
害を受けた。多くの人命が失われ、国土は戦火
で荒廃し、貴重な文化財が焼かれたり日本に持
ち去られた。民衆を主体とする義兵の活躍、李
舜臣指揮下の水軍の勝利、明軍の救援などで
日本軍は撤退したが、その傷もいえないうち
に、一六二七年、三六年の二度にわたって清軍
が侵入し(丁卯・丙子)の胡乱)、首都が占領さ
れ、清に服属を誓わされた。日本との関係
は、政権が豊臣氏から徳川氏にかわったことで
修復され、対馬宗氏との倭館も復活し、將軍の
代替りに通信使などの使節を派遣すること
一二度に及んだ。

一八世紀に入ると清を通して西洋の学問が入
って影響を与え、キリスト(天主)教が広まっ
た。政府はキリスト教を邪学とよんで禁止し、
何度も大弾圧を行った。一九世紀には平安道一
帯にわたる洪景来(一八二二—三三)が起るな
ど生活苦にあえぐ民衆反乱が相次ぎ、一八六二
年には全国的な広がりをみせるに至った。こう
して朝鮮が衰退をみせるころ、欧米列強が来航
して開国を要求し、六六年にはフランス艦隊
が、七一年にはアメリカ艦隊が江華島を攻撃し
た。これに対し高宗の父(興宣)大院君は鎖国
攘夷政策を固持し、キリスト教徒を弾圧しつ
つ列強の攻撃と対峙していた。しかし外戚閔氏

官僚制度が整備された。しかし王権は絶対的・
超越的な力をもち、政治は合議制によって行
われ、高級官僚の合議機関として初め議政府
のちに備辺司が実権をもった。第四代世宗から
第九代成宗にかけて国力が充実し、領域が鴨
緑江・豆満江の線まで拡大し、ハンゲル(訓
民正音)が創作され(四四〇)、基本法典である
『経国大典』をはじめ各種編纂事業が行われた。
官僚は原則として科挙で選ばれたとされてい
たが、実際は血縁・地縁の原理が強く作用し、そ
れが政府内部における激しい権力争いとして展
開した。一五世紀末には新興官僚による土禍が
起こり、一六世紀になると朱子学の解釈を理論
的武器とした学問上の争いの体裁をとる党争へ
と発展した。党争は大きく南人、北人、老論、
少論の四派に分かれて争われたが、官僚・儒生
がすべていづれかの党派に属し、父子代々続
く争いを李朝末期まで繰り返した。

冊封を受けた明朝には事大関係をつ結び、日本
とは対等の交隣関係を外交方針としていた。し
かし一五九二—九八年の豊臣秀吉軍の侵入(壬
辰・丁酉倭乱)・文禄・慶長の役)で大きな被
害を受けた。多くの人命が失われ、国土は戦火
で荒廃し、貴重な文化財が焼かれたり日本に持
ち去られた。民衆を主体とする義兵の活躍、李
舜臣指揮下の水軍の勝利、明軍の救援などで
日本軍は撤退したが、その傷もいえないうち
に、一六二七年、三六年の二度にわたって清軍
が侵入し(丁卯・丙子)の胡乱)、首都が占領さ
れ、清に服属を誓わされた。日本との関係
は、政権が豊臣氏から徳川氏にかわったことで
修復され、対馬宗氏との倭館も復活し、將軍の
代替りに通信使などの使節を派遣すること
一二度に及んだ。

一八世紀に入ると清を通して西洋の学問が入
って影響を与え、キリスト(天主)教が広まっ
た。政府はキリスト教を邪学とよんで禁止し、
何度も大弾圧を行った。一九世紀には平安道一
帯にわたる洪景来(一八二二—三三)が起るな
ど生活苦にあえぐ民衆反乱が相次ぎ、一八六二
年には全国的な広がりをみせるに至った。こう
して朝鮮が衰退をみせるころ、欧米列強が来航
して開国を要求し、六六年にはフランス艦隊
が、七一年にはアメリカ艦隊が江華島を攻撃し
た。これに対し高宗の父(興宣)大院君は鎖国
攘夷政策を固持し、キリスト教徒を弾圧しつ
つ列強の攻撃と対峙していた。しかし外戚閔氏

官僚制度が整備された。しかし王権は絶対的・
超越的な力をもち、政治は合議制によって行
われ、高級官僚の合議機関として初め議政府
のちに備辺司が実権をもった。第四代世宗から
第九代成宗にかけて国力が充実し、領域が鴨
緑江・豆満江の線まで拡大し、ハンゲル(訓
民正音)が創作され(四四〇)、基本法典である
『経国大典』をはじめ各種編纂事業が行われた。
官僚は原則として科挙で選ばれたとされてい
たが、実際は血縁・地縁の原理が強く作用し、そ
れが政府内部における激しい権力争いとして展
開した。一五世紀末には新興官僚による土禍が
起こり、一六世紀になると朱子学の解釈を理論
的武器とした学問上の争いの体裁をとる党争へ
と発展した。党争は大きく南人、北人、老論、
少論の四派に分かれて争われたが、官僚・儒生
がすべていづれかの党派に属し、父子代々続
く争いを李朝末期まで繰り返した。

には身分上昇の機会が与えられている点、その機会が完全に閉ざされ職業的にも賤視された被差別民である白丁などは異なる存在である。

農民が大多数を占める李朝の商品流通の主要な舞台は、全土に散在する一〇〇余の場市(五日ごとの定期市)であり、生産者や行商人(樞負商)が生活必需品の取引を行った。樞負商のなかでも開城を根拠地とする松商は独特の複式簿記(開城簿記)をもつなど、全国的な活動をした。都には慶とよばれる常設店舗があり、販売特権を与えられる代償に政府に物品を提供していた。一八世紀以降、大同法による貢納の地稅化とその錢・木綿納化により、都市化の進展と相まって都の商業活動は活発化する。貨幣は鑄造と紙幣(楮貨)があったが、政府の使用奨励策にもかかわらず、民間レベルでの流通水準は高くなかった。

対外貿易には、対馬宗氏を相手として釜山で行われた倭館貿易、義州・会寧・慶源で清との間に行われた開市があるが、中継貿易の性格が強く、生活必需品以外の商品の多くは朝鮮を通過して日本・中国へ流れていった。

【文化】李朝文化の特色の一つに金属活字の発達がある。政府を中心として何度も活字鑄造が行われ、印刷文化が発展した。また高麗青磁と並ぶ李朝白磁にもみるべきものがあり、秀吉の侵入時に工と製作技術が日本へもたらされ、日本の陶磁器業の基礎を築いた。

李朝は朱子学を公認思想として採用し、これ以外のもの、とくに仏教を公式には禁止した。朱子学は両班支配を支える理論的根拠として朝鮮社会を規定し、日本に影響を与えた李滉(号は退溪)や李珣(号は栗谷)などの学者が出、多くの学派が形成されたが、それはまた党争とも結び付いた。一方、觀念化し現実と遊離した朱子学を批判し、合理的認識による現実とのかわり合いを重視する実学派が生まれ、政治改革を主張した丁若鏞(号は茶山)や、身分制廃止を唱えた洪大容が出た。彼らの主張は実現しなかったが、後の開化思想に多大の影響がみられる。しかし一般民衆は朱子学に規定されつつも、それは異なる世界に生き、女性を中心に仏教が根強く信仰されていたし、土俗的な民間信仰の力も大きかった。彼らの意識のなから『春香伝』『沈清伝』『洪吉童伝』などの語り物(パンソリ)が育ち、ハングル文学として定着した。また絵画も両班の間では北宋画系の墨

絵にみるべきものが多いが、民衆に親しまれたのは民画であり、生活実態を写實的に描写した申潤福(生没年不明)や金弘道(一七〇一?)の風俗画も現れた。↓朝鮮史 <吉田光男>

朝鮮史研究会編『朝鮮の歴史』(一九七三・三省堂)▽李基白著、武田幸男他訳『韓国史新論』(一九七三・学生社)▽武田幸男編『朝鮮史』(一九七三・山川出版社)

李時珍 りじちん(一五九一—一六八〇) 中国、明代の本草学者。『本草綱目』の著者。字は東璧。晩年は瀟湖山人と号す。産薬地として知られる蕪州(湖北省蕪春縣)の生まれ。祖父も父の言聞も医者である。生後すも母が病み、自身も幼時から病弱であったため医書に親しんだ。一四歳で科挙の受験資格を得たが三度郷試に失敗、父業を継いで貧民の治療にあたり、有名になった。一五五七年に楚王府の奉祠正となって良医所の職務を兼ね、五八ごろ中央の太医院の院判に推されたが、一年ほどで辞して故郷に帰った。各地を訪ねて薬物採集や民間の処方・療法の調査などをして資料を集め、五二年から編纂に着手した『本草綱目』を七八年に完成。九〇年に刊行が開始され、死後の九六六年に完了。次子建元が刊本を神宗に献上した。同書は日本をはじめ、英・仏・独語などに訳され、東西の諸国に影響を及ぼした。↓本草綱目 <宮島一彦>

李時珍著、木村康一他註、鈴木真直訳『新註校定国訳本草綱目』一七巻・別冊三巻(一九七三・春陽堂書店)

リシツキー Tjapb Mappohny Jhenu-kni Lazar Markovich Lisitskiy (一八〇一—一八七〇) ソ連の画家、建築家。雅号はエリ・リシツキー Er. Jhenukni. Et. Lisitskiy。スモレンスク州ボチノク村生まれ。一九〇九—一四年ドイツのダルムシュタット工科大学に学び、革命後は一時シャガールが校長を務めたビテプスクの美術学校で教えたこともある。二一—二五年ドイツおよびスイスに滞在、オランダの「デ・ステイル」グループのメンバーとなった。二〇年代にはシュプレマティスムの影響の下、一連の宣伝ポスターを制作した。建築分野でも活躍し、数々の実験的な設計図を発表したほか、紡績会館(一九二五)、プラウダ新聞社のコンピュータ(一九二〇)などの作品がある。また書籍の挿絵や装丁、フォトモンタージュなど幅広い活躍を行い、モスクワに没。しかし、第二次世界大戦後の雪どけが訪れるまで、その仕事

は正当に評価されず、近年ようやく本格的な研究が始まったところである。 <木村 浩>

阿部公正訳『エル・リシツキー——革命と建築』(一九七三・彰国社)

利子付き資本 りしつきしほん interest-bearing capital zinsragendes Kapital capital porteur d'intérêt 産業資本や商業資本は、資本を現実の生産過程に産業的または商業的に投じて平均利潤を増殖するのに対し、利子付き資本は、その現実機能過程の外にあって現実の価値増殖過程をもたないのに、自己増殖する資本である。貨幣は、貨幣としての使用価値のほかに、資本として使用すれば利潤を生むから、この貨幣の所有者は、潜在的資本の貨幣を、現実機能させる産業資本家や商人に譲渡し、後者は取得した利潤の一部分を利子として支払う。したがって貨幣は、その所有者に利子を取得させる力を与える。すなわち、その所有者の貨幣は、譲渡により結局、自己増殖して回収されるのであり、彼の貨幣は資本となるのである。このように、現実の増殖過程をもたずして利子を得させる増殖様式から規定された資本を利子付き資本あるいは利子生み資本といい、また、貸付にもっともよく現れるので貸付資本ともいう。

【利子付き資本の運動とその特徴】利子付き資本の運動は独特である。貨幣資本家から機能資本家に利子付き資本の貨幣が前貸し譲渡され、機能資本家は現実の増殖過程で利潤をあげ、そのなかから利子をつけてこの貨幣を貸付資本家に復帰させる。この過程において、最初の譲渡と最後の復帰の両過程は、中間の現実過程とは本質的に異なる。現実過程では、価値が貨幣資本、生産資本、商品資本と変態して再生産の契機となるが、利子付き資本では貨幣の位置変換は変態ではない。貨幣資本家から機能資本家への移転は、一般の商品の所有移転、等価の交換という、販売とは異なり、なんらの等価も受け取らず、所有も移転されない。価値の譲渡は、貸付という独特の形態をとる。それは返還を条件に手放されたにすぎない。利子付き資本の運動を完結させた復帰の過程も、利子を伴い返済されるという独特の形態をとる。

【資本の物神性】こうして貨幣資本家には現実資本の再生産は視界から消え、貸し手と借り手の関係の外に置かれ、利子付き資本の運動は媒介過程の消滅した直截な形となる。一定期間

後の利子を伴った返済を条件に貨幣が手放されること自体は、貨幣が借り手の手中で現実のように結果したかによって変えられるものではない。返済不能のときには、貸付の債権は、借り手の資産を強制処分するまで自己を主張する。そこで利子付き資本とは、自己増殖の利子が労働者の搾取による剰余価値の一部分でありながら、そうとはならず、貸し付けた貨幣それ自体に直接結び付けられ、直接に生んだ果実と觀念される。つまり、貸付可能な貨幣を所有することは、利子を取得する力をもつことを意味し、結局、一定の貨幣はすべて一定の利子をもたず資本とみなされ、現実の増殖過程との関連の最後の痕跡さえも消えて、資本とは自己自体により自動的に自己増殖し利子を果実とするという表象が確立する。利子付き資本において、このような資本の物神性は最高の形態となり、その極に達する。↓利子 <海道勝稔>

K・マルクス著『資本論』第三巻第五篇第二章、第五章(向坂逸郎訳・岩波文庫)▽信用理論研究会編『講座・信用理論体系』IⅡ(元共・日本評論社)▽富塚良三他編『資本論体系6 利子・信用』(一九七三・有斐閣)

リシツポス Lysippos 生涯不詳。古代ギリシアの彫刻家。シキオンの出身で、紀元前三七〇—前三一〇年ごろ活躍。青銅彫刻に優れ、アレクサンドロス大王の宮廷彫刻家として王の肖像を制作、その大理石による模作が若干残されている。長い作家活動を通して約一五〇〇点の作品を残したと伝えられるが、それらはおそらく、彼の大きな工房で制作されたものと推察される。彼はまた、それまでのポリクレイトスの人体比率率を改め、自然に学んだ新しい人体の理想像を定めた。彼の比率率によれば、頭部は全身像の八分の一を占め、人体はいっそう優美になった。ローマ時代の模作で知られるパチカン美術館の『アポクシオメノス』(汗を落とす青年像)は、この新しい比率率を示すものである。このほか彼の様式を伝える作品に、デルフォイの『アゲラオス』、ナポリ国立考古美術館の『ファルネーゼのヘラクレス』などがある。 <前田正明>

リシノール酸 リシノール酸 ricinoleic acid 不飽和のヒドロキシカルボン酸の一つ。12-ヒドロキシシス-9-オクタデセン酸ともよばれる。グリセリドとしてひまし油中に存在するの

りじちん



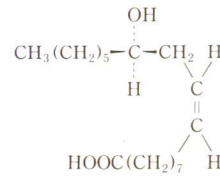
リシッポス 『アポクシュオメノス』 ローマ時代 大理石模作 高205cm パチカン美術館
原作はB.C.320年ころのブロンズ彫刻。競技を終えて、汗や香油をかき落とす青年。おそらく優勝者の記念像であろう。足をずらして立つすなりとした身体、前へ突き出した手の大きな動き、顔のものうげな表情など、古典期の彫刻とはすでに趣を異にしている。ヘレニズム美術への過渡的な作品

で、ひまし油をけん化して得られる混合脂肪酸をアセトンに溶かして、分別結晶を行うと得られる。常温では無色の油状液体で、エタノール（エチルアルコール）、エーテル、クロロホルムによく溶ける。ドライクリーニング用せっけんの原料になる。

《廣田 稜》

利子平衡税 りしへいこうぜい interest equalization tax ドル防衛の一環として、一九六三年ケネディ米大統領が国際収支特別教書で提案し、翌六年ジョンソン政権になって成立した税。金利平衡税ともいう。当時アメリカの金利水準は諸外国のそれに比べて低かったため、アメリカの投資家は高利回りの外国証券に投資する傾向が強く、長期外債の購入によって巨額のドルが流出し、国際収支悪化の一原因となっていた。そこでアメリカで起債する有価証券お

リシノール酸



分子式	C ₁₈ H ₃₄ O ₂
分子量	298.5
融点	α; 7.7°C β; 16.0°C γ; 5.0°C
沸点	α; 230~235°C / 9mmHg
比重	0.940 (測定温度27.4°C)
屈折率	(n _D ²⁰)1.4716

よび一年を超える商業銀行の対外貸付に課税することによって、長期資本の流出を抑制しようとしたのである。この措置はその後更新を繰り返しながら存続したが、一九七四年対外投融資規制の撤廃に伴い廃止された。

《土屋六郎》

リシマキア リオカトラノオ

リシマコス Lysimachos (前319~前281)アレクサンドロス大王の部将で、大王没後はトラキア王(前319~前318)、マケドニア王(前318~前317)。大王の没後、諸將と合従連衡を繰り返してそのつと中心勢力(ヘルディッカス、ポリペルコン、アンティゴノス一世)を共同で倒しつつ、また相互に拮抗し、ディアドコイ戦争を展開。最強の兵力を誇った。その間、紀元前305年マケドニア王を宣し、ガリポリ半島の地に自分の名を冠したリシマキアを建都した。圧政で人心を失い、また晩年エジプト王プトレマイオス一世の娘アルシノエ(二世)をも妃に迎えて家内の紛糾を招き、前281年二月小アジア西部クルペディオでシリア王セレウコス一世に敗れた。

《金澤良樹》

リジャーナ Regina カナダ、サスカチュワン州南部の都市で、同州の州都。人口一六万二六一三(一九八〇)。大陸横断鉄道の幹線・支線、航空路が会する交通の要地である。小麦地帯である大平原の中央に位置し、小麦、ウシの大集散地として知られる。また、農機具、雑貨、日用品などを周辺農村に供給する商業中心地であり、穀物塔、製粉・製油工場、自動車・農業機械組立て工場、家畜取引所がある。ほかに、木材加工、ビール醸造、印刷などの工業が発達している。一八二二年に建設され、八二年より一九〇五年にサスカチュワン州が設立されるまで

ノースウェスト・テリトリーズの州都であった。一九二〇年までカナダ王室北西騎馬警官隊の本部があったことで知られている。学校、図書館、公園などよく整備され、教育・文化の中心でもある。付近一帯は豊富な石油が埋蔵されていることが知られ、開発が期待されるが、西隣のアルバータ州の都市に比べて、経済活動はそれほど活発ではない。

《山下脩二》

リシヤール Jean-Pierre Richard (一九三〇~) フランスの批評家。マルセイユの生まれで、高等師範学校出身。イギリス、スペインなどで文学を教えたのち、帰国してパリ大学教授。第一著作『文学と感覚』*Littérature et Sensation* (一九五〇)以来、一貫してテーマ批評の方法に基づくエッセイを積み重ねた。感覚・感情・官能的レベルでの(フロイトの無意識領域における)意味の核心、すなわちテーマを抽出しつつ、そこから諸テーマの織り成す網目状連鎖とか、有機的統一とかを設定することに、批評の役割をみだした。『マラルメの想像的宇宙』*L'univers imaginaire de Mallarmé* (一九六〇)は、そうした諸テーマの巧みな配列により、マラルメの世界の出現に立ち会わせてくれる。他の主要著作に『シャトーブリアンの風景』(一九六六)、『ロマン主義研究』(一九七〇)、『ミクロレクチュール』II (一九七九)がある。

《松崎芳隆》

④ 有田忠郎訳『詩と深き』リシヤール著作集 2 (二〇〇六、思潮社) ⑤ 栗津則雄・沢沢孝輔・天沢退二郎他訳『現代詩11の研究』リシヤール著作集 3 (一九七五、思潮社)

リジュー Lisieux フランス北西部、カルバドス県の都市。人口二万五八二三(一九八二)。カインの東四九キにあり、トゥク川に臨む。この地の修道院で生涯を送ったカルメル会の修道女テレジア(仏語名テレーズ)「幼きイエズスのテレジア」「リジューのテレーズ」ともよばれる)を記念したバシリカ堂式教会(一九三〇年)があり、巡礼地となっている。ほかにサン・ピエール大聖堂(一二二一~一五世紀)、サン・ジャック教会(一五一一~一六世紀)などがある。機械、電気機械、食品、木工製品などの工業もある。第二次世界大戦中には大きな被害を受けた。

《高橋伸夫》

李朱医学 りしゆいがく 漢方医学の一学派。中国の金・元時代(一二一~一四世紀)に「金元医学」とよばれる新しい潮流が、劉完素、

張從正、李杲、朱震亨らによってつくられた。このうち李杲は、病気の原因は体外ではなく体内の環境にあると考え、朱震亨は李杲の考えを発展させて治療法などを生み出した。この二人の医説を李朱医学とよぶ。この医説を室町時代の日本の医家、田代三喜が中国に留学して修めて帰国、田代は日本における李朱医学の開祖と称される。田代に師事したのが曲直瀬道三で、彼は京都で多くの後進を指導、李朱医学は日本化され、充実して江戸時代初期まで日本の医学に重要な位置を占めた。なおこの医説は後世派とよばれる。↓金元医学

《内田 謙》

李秀成 りしゅうせい (一八一六~一八六六) 中国、太平天国後期の最高軍事指揮官。現在の広西チワン族自治区藤県の貧農出身で、一兵卒から身をおこし、相次ぐ軍功により一八五九年忠王に封ぜられた。英王陳玉成らとともに、一八五六年の大分裂で弱体化した太平天国の屋台骨を支えた。六〇年以後、おもに江浙地方の占領と経営にあたり、六〇年と六二年に上海に進攻し、英・仏軍、常勝軍、淮軍と激闘した。天王(洪秀全)の宗教的熱狂に覚めた批判をもち、戦略面でもしばしば対立したが、愚忠の観念から結局はこれに従った。天京(南京)放棄策がいれられず、天京最後の戦いの指揮をとり、敗北後幼天王を擁して脱出したが捕らえられ、六四年八月、曾国藩に処刑された。虜囚のなかで書いた『自述』は、太平天国研究の最重要文献だが、曾国藩は天王の病死に関する部分などかなり改竄して公刊した。また、この自述が投降の書であるか否かの評価が、中国共産党内の対立、つまり毛沢東と劉少奇の対立と絡んで、文化大革命の口火の一つとなった。↓太平天国

《小島晋治》

理趣経 りしきょう 大乘仏教の初期の経典。仏の真実の境地に至る道(理趣)を示せる経を意味する。具名を『般若理趣経』という。また不空訳では、『大乗金剛不空真実三摩耶経』が具名で、『般若波羅蜜多理趣品』が異名であるとき、その逆に解釈することもある。後期の『般若経』の一つで、『大般若経』の五四七巻の「理趣品」の発展形態である。密教経典の一つとしてみれば、第六全の『金剛頂経』の一部(大乗最上経)とも解釈できる。要するに本経は、大乘仏教の極地である「般若空」の思想が発展の極地に達し、いまや、空より不空、不空真実の境地を示すに至ったと理解すべきも

のである。空は理念上の境地でなく、実践のすべてを自由無礙たらしめる無執着の境地を意味するに至った。ここを示すため、いまやこの經典を示す説法の場合は「他化自在天王宮」の中となり、説法の主は薄伽梵毘盧遮那如来となり、すべて従来の現実のインドの舞台を離れて、完全に秘密の仏国土に移っている。徹底した現実肯定の「不空」「大樂」の世界観の背後には、強い自己調伏(降伏)の道が示されている。本経は、密教の極意を示すものとして真言宗ではつねに誦誦される。

〈金岡秀友〉

④ 八田幸雄編『梵藏漢対照 理趣経索引』(二九 高・平楽寺書店)

リーシユマニア症

リーシユマニア症(リーシヨウ リーシユマニア属 *Leishmania* の鞭毛虫が小形の吸血昆虫サシチヨウバエによってヒトに媒介されておこる感染症の総称。従来、臨床症状をはじめ、分布や媒介昆虫の種類などにより分類されていたが、中南米で新種や亜種がかなり存在し、また同一種でも地域によって症状が異なる場合もあり、免疫学や生化学的手法を用いて再検討されるようになった。従来代表的疾患は、ドノバンリーシユマニア *L. donovani* による内臓リーシユマニア症で、カラ・アザール(黒熱病)あるいはダムダム熱などもよばれる。→カラ・アザール

このほか、皮膚リーシユマニア症ともよばれる東洋癩腫があり、病原体は熱帯リーシユマニア *L. tropica* で、顔面や四肢に無痛の丘疹ができて、中央部が潰瘍化した腫瘍となる。普通は癬痕を残して自然治癒する。

病原体を検出するには、骨髓穿刺や脾穿刺などによって採取したり、皮膚や粘膜病巣の辺部から組織を採取して検査する直接検出法のほか、免疫反応その他によって間接的に感染を推定する間接検査法もある。

なお、リーシユマニア属は肉質鞭毛虫門動物性鞭毛虫綱キネトプラスト目トリパノソーマ科に属する原生動物(原虫)の代表的グループの一つで、アマスティゴートとプロマスティゴートの二種類の形態をもつ。アマスティゴートは従来リーシユマニア型(細胞寄生体)とよばれていたもので、直径一〜三ミリの球形または卵形で、患者の脾臓、肝臓、リンパ節、骨髄中にみいだされる。プロマスティゴートは従来レプトモナス型(培養型)とよばれていたもので、中間宿主であるサシチヨウバエの腸管内に認め

れ、幅二六ミ、長さ一〇〜二五ミリの大きさで、短西洋サシチヨウバエの長紡錘形に至る種々の形態と鞭毛をもつ。

リーシユマニア属の生活史をみると、脊椎動物体内では通常、網内系細胞に侵入してアマスティゴートとして分裂増殖し、一過性にプロマスティゴートとなって新しい細胞に侵入、ふたたびアマスティゴートに戻って増殖する。すなわち、サシチヨウバエの吸血によってアマスティゴートが取り込まれると、中腸や後腸内でプロマスティゴートに変態し、二分裂で増殖したのち、前方に移動して口吻を満たす。このようなサシチヨウバエがヒトや動物を吸血すると、プロマスティゴートが体内に注入され、細胞内に侵入したのちアマスティゴートとなって増殖を始めるわけである。

〈松本慶蔵〉

リシュリユー Armand Jean du Plessis de Richelieu (一六〇一—一六四二)

フランスの政治家、枢機卿。西部フランスのポアトゥー地方に所領をもつ貴族の子として、パリに生まれる。一六〇七年にポアトゥー地方のリュソン司教となる。一四年パリで開かれた全国三部会にポアトゥー聖職者代表として出席し、国王ルイ一三世の母后で摂政のマリ・ド・メディシスの目にとまって一六年国務卿に任命された。一七年母后の寵臣コンチニ(通称アンクル元帥)がルイ一三世の手に暗殺されると、母后がフロアに追放され、リシュリユーは母后の後を追った。その後、国王と母后の和解の仲立ちとしてルイ一三世に認められ、二二年枢機卿、二四年国務会議のメンバーとなり、同年宰相の地位についた。

リシュリユーの政治理念は王国の隆盛と国王の尊厳の確立にあり、彼は「国家理法」*Raison d'Etat* の観念を明確に意識していた。彼が、国家のなかに独立したプロテスタント国家を建設しつづけたユグノー(新教徒)派の勢力打破に努めたのもこの観念に添ったものである。ルイ一三世が一六二〇年、アールン地方に兵を進めて以来、ユグノーはふたたび武力抵抗に突入し、リシュリユーが登場したときには、国家の安全を脅かすほどの反乱を展開していた。彼は信仰の自由には寛容を示したが、ユグノー派が独自の政治勢力となることを認めず、彼らの最大の牙城ラ・ロシェル市を二七年攻略し、約一年に及ぶ海上封鎖のち陥落させた。二九年「アレスの王令」によってユグノー派は信仰の

自由は認められたが、いっさいの政治的・軍事的特権を剥奪された。これと並行して反抗的な貴族は容赦なく抑圧された。リシュリユーの政治目標がすべての臣民を国王に服従させることにあったからである。ルイ一三世の親政(一六三二)後、母后マリ・ド・メディシスと王弟ガストン・ドルレアンは、反リシュリユー勢力として絶えず陰謀の中核を形成していた。リシュリユー失脚を画策して失敗した三〇年の陰謀は「欺かれた者たちの日」(一〇月一日)

とよばれ、その事件で中心的役割を果たした母后マリ・ド・メディシスはベルギーに亡命し、マリヤック兄弟は処罰された。三二年にロレーヌ公やモンモランシー公、四一年にソアソンの伯、四二年にはサン・マルスやブイヨン公らの反乱が続いたが、いずれの陰謀にもガストン・ドルレアンが関与しており、これらは王権の手によって粉砕された。

リシュリユーは、対外的にはフランス王国の国際的威信を高めるため、ハブスブルク家のヨーロッパにおける覇権確立の阻止に努めた。マントバ継承戦争を巧みに利用してピネロロとカザレにフランス軍の駐屯地を確保し、スペインとオーストリアの動きを妨害するための戦略的獲得を目ざした。一六一八年に始まった三十年戦争では、ドイツの新教派を支援していたが、三四年新教派のスイエデン軍が皇帝軍に敗れて戦線から離脱すると、ハブスブルク家との対抗上、三五年この戦争に直接参戦することを余儀なくされた。リシュリユーは、四二年国王のスペイン地中海岸の親征に同行して病を得、同年一月四日パリで死去した。

リシュリユーが亡くなるころには、フランスの版図はほぼ自然国境に近づいていた。リシュリユーの時代は、また租税の増徴に伴って農民一揆が激発した時代で、ケルシー地方のクロカンの乱(一六三六)、デジョンやルアンのアラントの乱(一六三六)、南東部の農民アンの反王(裸足同盟)の乱(一六三九)と相次いで起こった。政治面では、高等法院の建白権が制限され、アンタンダン(地方長官)制が設置されて、国王直轄行政の強化が図られた。経済面では、海外貿易への投資が奨励され、スペイン、



リシュリユー(枢機卿) ベルサイユ宮殿

オランダ、イギリスとの国際商業戦争に突入していった。リシュリユーは、フランスにおける新聞の始まりである『ラ・ガゼット』*La Gazette* 誌を保護し、一六三五年にはアカデミー・フランスを創設してフランス語の改良や純化に尽力した。著書に『教理問答』*L'Instruction du Chretien ou Catechisme de Leçon* (一六三二)などがある。

〈志垣嘉太〉

リシュリユー Armand Emmanuel du Plessis, duc de Richelieu (一六〇一—一六四二) フランスの政治家。大革命の初期に亡命し、ロシア軍隊に入る。その勇敢さと高潔な人格をロシア皇帝アレクサンドル一世に認められて一八〇三年オデッサの知事に任ぜられ、この地の経済発展に尽くした。王政復古とともに帰国し、一五年首相となる。翌年の選挙で議会の多数を占めた立憲王党派に依拠して中道政策を進め、一八年までにナポレオン戦争の賠償金の支払いと外国軍隊の撤退を実現した。二〇年王位継承者ベリール公暗殺後の反動化の時期にふたたび首相の任を帯びたが、ビレルールら過激王党派の攻勢を支えきれず二一年末辞職した。(服部春彦)

李准 リジューンリーチン (一九二一—)

中国の小説家、映画シナリオ作家。河南省洛陽県(現在の孟津県)の人。河南大干魁(一九四二)で中学中退、働きながら独学。抗日戦中に業余劇団に参加。解放後、洛陽幹部文化学校教師をしつつ創作。短編『不能走那条路』(一九五三)で一躍有名になる。一九五四年河南文連に所属、多くの短編を書き、『李双双小伝』はじめ六冊の短編集を発表。また、『李双双』など映画シナリオも四本ほどある。農村集団化、女性解放問題を新鮮かつユーモラスな筆致で描き、人物描写

に定評がある。文化大革命後、長編『黄河東流去』(二六)で健在ぶりをみせた。(伊藤敬一) ④ 外文出版社訳・刊『耕雲記』(李双双小伝) 中の一編。『中国短編小説集』—たたいの行程』所収(一九五)

利潤 *Profit* *Profit* *Profit*

利潤とは、売上高からその売上げに要した賃金・地代・利子・原材料費などの全費用を控除した額である。ところで一般に、賃金は労働用役に対する報酬であり、地代は土地用役に対する報酬であり、利子は資本用役に対する報酬であるといわれるが、利潤は何に對する報酬であらうか。これにはいろいろな説があるが、通説に従ってそれらを分類すると、次のようになる。

- (1) 暗黙的要素収益説 個人業主などに顕著にみられるように、利潤といわれるものには生産要素への報酬とみなさるべきものが含まれている。たとえば、本来、本人の労働用役に対する報酬である賃金、本人所有の資本用役に対する報酬である利子、本人所有の土地(自然資源)用役に対する報酬である地代、すなわち暗黙的賃金、暗黙的利子、暗黙的地代要素とみなさるべきものが利潤のなかに含まれている。
- (2) 独占説 生産要素の供給が、自然に、もしくは人為的に制限されることから生ずる。
- (3) 新機軸説 利潤は企業家の新機軸、すなわち新しい商品の導入、新しい生産方法の開発、新しい市場や供給源の開拓、新しい経営組織の確立、といった事柄に対する報酬であり、これらの新機軸が模倣されて他の企業に普及していくにつれて消滅する。
- (4) 危険負担説 貨幣経済の特徴は、それが将来の不確実性を内包しているということである。したがって、企業家は事業を行うにあたって危険を負担しなければならず、企業家はその危険を負担させるには、高い報酬、すなわち利潤を与えられなければならない。

新機軸説もこの危険負担説の特殊ケースであると考えることが出来る。なぜならば、新機軸はまさに将来が不確実であるがゆえに意味をもつものだからである。

(5) 剰余価値説 利潤は剰余価値の転化された現象形態としてとらえられる。すなわち、ある財の生産に投下される労働時間と、その財を生産するために投下される労働力の再生産に必要な労働時間(これは労働者の生活資料の生産に要する労働時間で計られる)の差として定義され

る剰余価値の現象形態とみなされる。したがって利潤は、労働時間の延長や必要労働時間の短縮によって増加する。なお、この説では、利潤には利子や地代も含まれることになる。

〔近代経済学における利潤決定理論〕利潤の概念規定については、上記のようにいくつかの説があるが、次に、現在「近代経済学」において支配的な利潤(または利潤率)決定理論についてみてみよう。

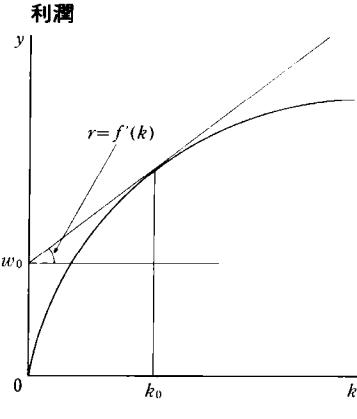
〔限界生産力説〕議論を簡単にするために、所得(または費用)は賃金と利潤の二つの範疇に大別され、前者は労働、後者は資本所得であると仮定する(それゆえ利潤のなかに利子が含まれ、資本のなかに企業家才能が含まれることになる)。また、土地は無視する。この場合、企業が利潤率極大行動をとるものとする。すなわち、利潤率は資本の限界生産力に、賃金率は労働の限界生産力に等しくなる。これは次のように示せる。いま Y 、 K 、 L をそれぞれ生産物、資本、労働とし、 r 、 w をそれぞれ利潤率、賃金率とする。生産関数を一次同次とすれば、 $Y = F(K, L) = rK + wL$ より $r = \frac{Y}{K} - \frac{wL}{K}$ が得られる。ただし Y 、 K は L で除した値である。利潤率は

$$r = \frac{f(k) - w}{k}$$

と表され、したがってこの極大値は、 r を k で微分することによって

$$f'(k) = \frac{f(k) - w}{k} = r$$

という条件で与えられるが、この左辺は資本の限界生産力を表す。また、賃金率 w は、この式から



で与えられるが、これは労働の限界生産力を示す(図参照)。

かくして、限界生産力説は、各要素の需要曲線を意味する限界生産力曲線と各要素の供給曲線との交点で、要素価格が決定されると説く。〔ケインズの理論〕これは資本家または利潤からの貯蓄性向(s_p)と労働者または賃金所得からの貯蓄性向(s_w)が異なるという想定にたつて、蓄積率が利潤率を決定するとみる。簡單化のために $s_w = 0$ と置く。利潤(P)からの貯蓄—それは経済全体の貯蓄でもある—は $s_p P$ で与えられる。したがって、貯蓄=投資(I)の均等より $I = s_p P$ となり、この両辺を資本で除すと

$$\frac{I}{K} = \frac{s_p P}{K}$$

が得られる。すなわち蓄積率(左辺)が大きくなればなるほど利潤率(P/K)は大きくなる。そして蓄積率自体は、たとえば企業家の将来に對する予想あるいはア・マル・スピリットによって規定されるとみなされる。(大塚勇一郎) ④ J・ステイグラー著、松浦保訳『生産と分配の理論』(一九七〇、東洋経済新報社) ⑤ P・ガレニヤニ著、山下博訳『分配理論と資本』(一九六〇、未來社) ⑥ J・ロビンソン著、山田克巳訳『経済成長論』(一九五三、東洋経済新報社) ⑦ P・A・サムエルソン著、都留重人訳『経済学』(原書第一版)全二冊(一九二〇、岩波書店) ⑧ L・L・パシネッティ著、宮崎耕一訳『経済成長と所得分配』(一九五五、岩波書店)

〔マルクス経済学からみた利潤〕マルクス経済学においては、利潤は、剰余価値の転化された現象形態として現れる。資本主義的商品価値 W は、消費された不変資本の価値 c 、可変資本の価値 v および剰余価値 m からなる。つまり $W = c + v + m$ である。この商品価値のうち、商品生産のために資本家が費やした価値を補填するにすぎない部分 $c + v$ は、一括して費用価格 k を構成する。したがって、費用価格の観点からは、 v 部分が生産過程で新しく付加された価値であり、さらに、剰余価値を伴って創造された価値であるにもかかわらずそれが消滅し、その資本主義独自の役割も消滅している。それは、資本家の立場からは、商

品の生産のための費用が資本支出($c + v$)で計られ、その商品の生産に現実に要費している労働支出($c + v + m$)で計られるのではないからである。この関係のもと、すなわち、商品の販売という流通を通じて支出されたものを補填する関係を含むものでは、剰余価値は単に商品価値のうちの費用価格を超える超過分となる。生産過程の終了後、商品流通から復帰するときには、消費された資本価値全体($c + v$)の価値増加分にすぎなくなる。

ところが、投下資本価値全体ということでは、この観点はさらに進んで、剰余価値が投下資本のうち価値増殖過程に入り込む消費された価値部分のみならず、固定資本の非磨滅部分のような生産物に入り込まない部分の増加分ともなる。つまり、現実の労働過程では総資本が機能しているから、剰余価値の形成には全部的に寄与しているとみなされる。こうして剰余価値は、生産に充用された資本全体に対する価値増加分となる。

この剰余価値である費用価格を超える超過分は、資本が行う生産から生ずるから、生産に投下された資本のいろいろな価値要素から均等に生じたようにみえ、投せられた、したがって充用された資本全体から発生しているようにみえるのである。それが生産に投せられた資本のどの部分から生ずるかはまったく問われず、また、資本家にとってはどうでもよいことになる。こうして、投せられた資本全体に対する剰余価値の比率として利潤率がとらえられる。これは、剰余価値率の転化された形態にほかならないが、この剰余価値率の利潤率への転化を基礎として、剰余価値の利潤への転化が誘導される。利潤率は、事実上、利潤に先だつ歴史的出发点であるが、このように、投せられた資本全体の、資本家的に観念された産物としては、剰余価値は費用価格を超える超過分として、利潤 p という形態を受け取る。

利潤は、剰余価値の転化された形態であるが、さしあたりここでは、まだ剰余価値と同じ量である。ただ、資本家的観念で神秘化されている。といつても、資本主義の生産そのものから必然的に発生して行く形態を生産しているのはあるが、商品価値は、 $w = c + v + m$ から $W = c + v + m$ に転化される。一方で労働力の価値が「労働の価値」としての賃金という転化された形態で現れるのに対し、他方その対極で

は、剰余価値が利潤という転化された形態で現れる。このように、利潤に転化された形態では剰余価値の起源の全秘密や資本と賃労働の関係が隠蔽される。だから利潤は、費用価格に対応した、費用価格の超過分という、ふさわしい形態で現れる。したがって、剰余価値と利潤とを混同してはならない。

〔利潤率とその運動〕利潤はさしあたり剰余価値と同じ量であっても、利潤率 p' は初めから実質的に剰余価値率 m' と異なる。

$$p' = \frac{m}{c+v}$$

であり、

$$m' = \frac{m}{v}$$

だから、 $p' < m'$ の関係にある。 $c=0$ でないからである。

$$p' = \frac{m}{c+v} = \frac{m}{v} \cdot \frac{v}{c+v} = m' \cdot \frac{v}{c+v}$$

である。利潤率は、年間として計算されると、剰余価値率のかわりに剰余価値年率 M' ($=m'v$)、 n は資本の回転数)となるから、

$$p' = m' \cdot n \cdot \frac{v}{c+v}$$

となり、利潤率は、剰余価値率、資本の回転数に正比例し、 $n(c+v)$ すなわち資本の有機的構成の高度化に逆比例する。

ところで、個別的利潤率では剰余価値と利潤とは同じ量であるが、種々の生産部門においては、利潤率の決定要因である剰余価値率、資本の回転、資本の有機的構成は多かれ少なかれ異なっており、商品が価値どおりに販売される限り、価値生産も剰余価値の生産も異なり、部門そのものの個別的な利潤率は異なる。そこで、資本の回転、剰余価値率が一定でも、資本の有機的構成は各部門で異なり、利潤率も異ならざるをえない。

しかし、異なる利潤率から、各部門間の資本間では、競争により一つの中位的または一般的な利潤率が形成される。なぜならば、資本は絶えず有利な利潤率を旨とし、その競争の結果、各生産部門における資本が社会的総資本の部分からず割合に応じて剰余価値の可除部分を得るからである。社会的総資本の資本構成と剰余価値は、各生産部門の資本構成の平均 \parallel 平均的費用価格と剰余価値の平均 \parallel 平均利潤とからなり、かくして生産価格となるのである。この平

均的資本構成と一致する商品価格は価値とも一致し、利潤は剰余価値と一致する。だが、資本構成がより高い部門では、平均利潤を得ている生産価格は商品価値より高く、資本構成が低い部門では、商品価値より低くなる。それは、資本の移動 \parallel 競争を通じて利潤が平均化され一般化したからである。

したがって、すべての商品は、等しい量の資本に対して等しい率の利潤が実現されるような価格で販売される。各部門の資本構成その他の条件いかなを問わず、各部門の資本を集めた総体としては等しい率の利潤を獲得し、各資本は平均利潤を確保する。これは、生産された剰余価値の実現の問題であり、各部門の分配の問題であって、商業利潤も平均利潤に参加するのである。

このように、商品価値は生産価格となり、利潤は平均利潤となつて、量的にも個別的には剰余価値と一致しなくなる。その結果、利潤の本質および起源は完全に隠蔽され、まったく痕跡すら残さなくなる。資本主義の神秘化はさらに推し進められるのである。

④ K・マルクス著『資本論』第三巻第一篇第一章、第二章(向坂逸郎訳・岩波文庫)岡崎次郎訳・大月書店・国民文庫)

李舜臣 りしゆんしん (西暦一五九七) 朝鮮、李朝、壬辰・丁酉倭乱(豊臣秀吉の朝鮮侵略)における水軍の名將。徳水の人。字は汝諧。貞科に及第した。女真との戦いに軍功をたて、柳成龍の推薦を受けて九一年に全羅左道水軍節度使となった。船上に蓋をのせ鎗刀を装備した亀甲船を建造して防備に努め、翌九二年壬辰の乱が起こると慶尚左道水軍節度使の元均を救援して、日本水軍を玉浦、唐浦、唐項浦、閑山島、釜山など慶尚道海域に連破した。その大勝により朝鮮軍は制海権を確保し、戦局を転換して日本の侵略を挫折させる機をつくりだした。宣祖は舜臣の軍功を厚く賞し、九三年忠清全羅慶尚三道水軍統制使を兼職させて全水軍の指揮をゆだねた。九七年丁酉の乱には、初め元均の讒言により統制使を罷免されたが、元均の敗死後に再起用され、九八年一月露梁の戦いで日本水軍を圧迫し、九八年一月露梁の戦いで大勝したが弾丸にあたって戦死した。忠武公と



李舜臣 画像

證を贈られ、救国の名將として長く追慕された。一 文禄・慶長の役

利潤分配制度 りしゆんぶんばいせいせいど profit sharing system 企業があらかじめ定められた一定の計算基準により、利潤の一部を賃金以外の付加的給付として従業員に分配する制度。

その目的は、従業員を企業と共通の利害関係にたたせ、労使協調を強化する、行動と成果の関連を実感させ、創意・工夫・能率向上を刺激する、一体感・帰属感をもち、定着率を向上させるなどである。分配総額の決め方としては、①利潤総額の一定割合相当額、②株式金額の一定割合相当額、③利潤総額から株式以外の剰余当額を控除した残額全部、④同上の残額を労使間で折半した額などがある。分配の方法には、現金制、繰延べ制、混合制の三種がある。現金制は、自己への分配利潤を単なる臨時給与として理解し、利潤分配制の意義を忘失させる欠陥がある。繰延べ制は、各従業員への分配額を信託基金の個人別勘定口座に振り込み、退職や廃疾等の特定時に支払うものである。混合制は、現金制と繰延べ制の併用である。現在、利潤分配制のもっとも普及しているアメリカでは、繰延べ制が多い。利潤分配制を付加価値分配や従業員持株制と混同してはならない。前者は成果(フロー)の分配であるのに対し、持株は資本(ストック)への所有参加である。しかし前者は、利潤と付加価値のように分配原資を異にしている。利潤分配制の歴史は長い。そのわりに普及していない。利潤の額が変動して効果が不安定なためである。(森本三男)

利潤率の傾向的低下の法則 りしゆんりつのかげこうていせいかのほうそく law of the tendency of the rate of profit to fall Gesetz des tendenziellen Falls der Profitrate 超過利潤獲得を旨とする個々の資本の

不断の蓄積は、労働生産力を高め、同時に社会

全体の資本の有機的構成を累進的に高度化する。この資本構成の累進的高度化は、不変資本 c に比して生きた労働に投下される可変資本 v の減少であり、剰余価値率 m' を不変とするなら、増大する投下総資本 $c+v$ に対する剰余価値総量 m の比率である平均利潤率 p' を絶えず低下せしめる。計算例で示せば、次の(A)から(D)への進行である。

(A) $50c + 100v + 100m = 250$

$$m' = \frac{m}{v} = 100\% \quad p' = \frac{m}{c+v} = \frac{100}{150} = 66\frac{2}{3}\%$$

(B) $100c + 100v + 100m = 300$

$$m' = 100\% \quad p' = \frac{100}{200} = 50\%$$

(C) $200c + 100v + 100m = 400$

$$m' = 100\% \quad p' = \frac{100}{300} = 33\frac{1}{3}\%$$

(D) $300c + 100v + 100m = 500$

$$m' = 100\% \quad p' = \frac{100}{400} = 25\%$$

このように平均利潤率の漸次的低下は、労働生産力の低下からおこるのではなく、逆の増大によって引き起こされており、労働の社会的生産力の発展の進行を表す資本主義的生産様式に特有な表現である。したがって、資本主義的生産様式の本質から自明な必然性として利潤率は低下せざるをえないのである。

ところで、この利潤率の低下は、利潤量の増大を排除しない。むしろ、この平均利潤率の低下は、かならず社会の利潤総量の増大を含んでいる。なぜなら、蓄積の進展は、一方で、労働者を増大し、搾取度を増大して社会の総資本の取得する剰余価値量を増大し、他方で、蓄積による労働生産力の増大が、社会の生産手段の総価値の増大より生産手段の分量をはるかに増大させるので、それに組み合わされる労働者はますます増大し、労働の搾取はますます増大するからである。このように社会全体としては、一方で利潤率の低下は、他方で利潤量の増大となる。これは、社会の総資本が、平均利潤率の漸次的低下より以上に累進的に増大しなければならぬことを意味する。そして超過利潤を求めると個々の資本の蓄積は、社会全体としては利潤率の低下に結果し、この結果は、逆に個々の資本家により累進的規模の蓄積への強制法則となる。

この利潤率の低下の法則には反対に作用する